



雨蛙



川崎ゆきお

雨季、雨が降っている。空梅雨だったのが、思い出したように雨。数年前、いや、十年、いや二十年か三十年になるかもしれない。雨蛙がいない。カタツムリもない。

お爺さんは雨の止んだ庭を見ながら、ふと思い出した。物干し竿が竹から樹脂製になった頃からだろうか。雨蛙がよくそこに座っていた。

「雨蛙は雨の降る前に鳴くんだ」

お爺さんが孫に話す。

「だから雨蛙なの」

「雨が好きなのもかもしれん。うちの庭には池はない。近くに小川もない。水が無い場所に住んでおるので、雨は大事なんじゃ」

「水が無いと困るの」

「さあ、わしは雨蛙ではないので、よう分からん」

「雨がいないときはどうするの。水不足でしょ、お爺さん」

「地下水があるんじゃろうなあ」

「どこに」

「庭の下じゃ」

「下に水があるの？」

「わしが子供の頃、この庭を少し掘った。池を作ろうとしてな。捕ってきた魚を飼おうとしていたんだ。それで、掘った。するとすぐに水が出て来た。二十センチか三十センチほどかな」

「井戸が出来るね」

「底に少しだけ溜まった。もっと掘ればよかったんじゃが、泥で濁っておるので、魚は無理じゃ」

「じゃ、蛙も雨が降らないときは、地下に入っているのかなあ」

「さあ、庭の雨蛙を追いかけたわけじゃないから、知らんがなあ。いつもは庭木の葉っぱにおったのう」

「まだいるの？」

「いないよ。わしも気にしたことがなかったけど、いない」

「でも、雨が降る前に鳴いているよ」

「それは、わしも聞いたが、鳥だったり、別の虫だったりする」

「雨蛙だよ」

「しかし、姿が見えん。もうしばらく見ておらん」

「今、探しては駄目」

「木の葉によくおった」

孫は庭を探した。

「どうだった」

「いないよ。お爺さん」

「そうだろ」

孫はその夜、夢を見た。当然青い雨蛙の夢だ。

畳の上に座布団ほどの大きさの雨蛙が座っている。孫はその背に乗り、家の中をゆっくりと進んだ。しかし、雨蛙は歩くのがしんどいらしく、いきなり飛んだ。孫は天井に頭が当たりそうになった。

その夢をお爺さんに話した。

「ハハハ、まるで童話だね」

「絵本みたいだったよ」

その日の夕方、雨蛙が鳴いた。そして夕立が来た。

「やっぱりいるんだよ。お爺さん、雨蛙」

「そうじゃなあ」

了